

『春水』手稿：95年の劇的な旅路の点と線

潘，世聖
華東師範大学

<https://hdl.handle.net/2324/1913952>

出版情報：“《春水》手稿与日中文学交流：周作人、冰心、滨一卫” 国际学术研讨会论文集. 1, pp.167-171, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：



『春水』手稿

——95 年の劇的な旅路の点と線

華東師範大学 潘 世 聖

1

1922 年から 2017 年まで 1 世紀近い時を経て、冰心の小詩単行本の一つ『春水』の完全原稿（清書原稿）が、長い「休眠」状態を終え、研究者・読者・一般人の前に姿を現した。九州大学附属図書館に所蔵される『春水』手稿の由来、とりわけ海を渡って日本にもたらされた経緯、さらには手稿をめぐる冰心、周作人、および若き日本人学徒・濱一衛、等々に関することのすべては、中里見敬教授の論文「冰心手稿藏身日本九州大学——《春水》手稿、周作人、濱一衛及其他」に余すところなく述べられている。当論文により発掘された冰心自身による『春水』手稿は、きわめて貴重で価値が高いものであり、それが日本に伝来し保存された歴史的経緯の詳細を解き明かした本論文は、学術的にも資料的にも高い価値を有する。

筆者は論文の著者である中里見敬教授と二十年来の友人である。彼が『春水』手稿を研究する過程で、我々は互いに情報を交換し合い、ともに問題の検討を行ってきた。その間、彼の厚意により、我々はいっしょに九州大学附属図書館で『春水』手稿を実見し、その後さらに濱文庫の文献資料を調査する機会を得た。手稿を閲覧し、他の貴重な資料を見るうちに、歴史の現場と細部が徐々に私の中で復元され、歴史の胎動と登場人物の息づかいがはっきりと感じ取れるようになってきた。

ほぼ完璧な状態で保存されていた『春水』手稿を目にして、まずはその由来の劇的な軌跡に驚嘆の念を覚えざるを得ない。

1922 年、数年前から文学活動を開始していた弱冠 22 歳の燕京大学文学系の学生・冰心は、この年数多くの小説、散文、そして新詩を発表した。『繁星』と『春水』の詩篇は相繼いで新聞紙上に連載された。同年 11 月、冰心は詩集『春水』の手稿を完成させ、先生である周作人に渡した。愛弟子の才能を認めた周作人は、自ら主編を務める「新潮社文芸叢書」に『春水』を入れ、しかもその第一冊として 1923 年 5 月に刊行した。3 か月後の 8 月には、同じ叢書の第二冊として魯迅の『呐喊』が出版されている。

『春水』出版後、手稿は主編である周作人のもとに留め置かれていたが、1939 年 10 月、

周作人が書斎を整理中にたまたま出てきたため、装丁・題字して、日本の濱一衛に郵送したのである。その後、濱一衛は1984年に亡くなるまで、『春水』手稿および中国演劇関係の貴重資料を大量に珍藏していたのである。

1987年、その学術的価値と特色により、九州大学附属図書館は濱一衛が収集した資料を受け入れ、「濱文庫」を設立した。そして、この貴重な資料を保管するとともに整理研究を行い、同年早くも『濱文庫（中国戲劇関係資料）目録』（九州大学附属図書館教養部分館，1987；第二版，1988）を作成した。目録の編者が中国現代文学の専門家でなかったため、しかも『春水』が毛筆で書かれた手稿本（写本）であったために、古籍の四部分類「経史子集」の集部の最後に編入され、「春水（一卷） 冰心女士撰 民国二十八年 北平 写本」と記載された。2016年末、周作人日記の1939年の部分が『中国現代文学研究叢刊』に掲載公開された。そこには『春水』手稿を贈るという記述があり、中里見敬教授はその情報を得るやただちに確認と検討を行い、『春水』手稿が完璧な状態で九州大学附属図書館の濱文庫に保存されていることを、論文で学界と世間に知らしめたのである。

詩集『春水』が出版された後、その手稿は2017年まで丸々95年間「休眠」状態にあった。その百年近い旅程には、歴史的な著名人物、現代中日両国の文化・学術界の人的交流と運命が交錯し、凝縮している。若くして文学的名声を獲得した冰心、周作人と冰心の師弟関係、濱一衛の北平留学と彼の中国文学・文化に対する情熱、とりわけ中国演劇への偏愛、周作人と日本人学徒との交流等々である。これらが『春水』手稿の時空を形成し、必然と偶然が相まって劇的な事実——『春水』手稿の完璧な状態での保存——へとつながったのである。

2

濱一衛先生が一生涯をかけて収集された書籍、文献資料を所蔵する「濱文庫」の中で、冰心研究者あるいは中国現代文学研究者にとって最も魅力的なものは何かといえば、もちろん『春水』手稿であろう。だが実のところ、濱文庫は学者個人が収集した資料の「集合体」として、唯一無二で代替不可能な特色と価値を備えている。このコレクションの特色ある主題——中国演劇・戯曲文学、とりわけ1930年代の北平を中心とする中国演劇・戯曲文学——は、すでに中日両国の学界から注目されており、学術・歴史・文化的に重要な意義を示している。

この度、『春水』手稿の考察と報告を行った中里見教授は、近年来、濱文庫の中国演劇資料の整理と研究に尽力している。2007年に九州大学附属図書館が貴重文物講習会を開催した際、東北大学出身で中国古代小説を専門とする中里見教授は濱文庫の整理と紹介を担当し、同文

庫の資料に対して体系的な調査・整理を開始し、一連の研究成果を発表した。

- 濱一衛著、中里見敬整理『中国の戯劇・京劇選：濱一衛著訳集』（福岡：花書院，九州大学大学院言語文化研究院 FLC 叢書 3）2011
- 中里見敬・戚世雋・中尾友香梨・山根泰志・李麗君『濱文庫所蔵唱本目録』（福岡：花書院，九州大学大学院言語文化研究院 FLC 叢書 11）2015
- 中里見敬・中尾友香梨・山根泰志「濱文庫の概要と現状：1930年代を中心とする中国演劇資料の宝庫」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2011/2012
- 中里見敬「濱一衛所見 1930年代中国戯劇：一個開拓表演史研究的日本学者」『文化遺産』2014年第4期総第31期（中国・中山大学中国非物質文化遺産研究中心）2014
- 中里見敬「濱一衛の見た一九三〇年代中国演劇：京劇」『中国文学論集』第43号（九州大学中国文学会）2014
- 中里見敬「濱一衛の見た一九三〇年代中国芸能：北平・天津」『九州中国学会報』第53号（九州中国学会）2015
- 中里見敬「濱一衛の北平留学：周豊一の回想録による新事実」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015
- 中里見敬「濱一衛の北平留学：外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態」『言語文化論究』第35号（九州大学大学院言語文化研究院）2015
- 中里見敬「濱一衛の見た一九三〇年代中国芸能：開封・呉興」『九州中国学会報』第54号（九州中国学会）2016

これらの成果は、濱文庫の独特な様相を明らかにし、濱文庫資料が中国演劇研究に与えた新たな刺激と視点を示すもので、参考に値する。

筆者は中里見教授の紹介により、濱文庫の資料を閲覧する機会を得た。濱文庫の最大の特徴である中国演劇、および中国古典文学以外にも、中国近現代文学・文化研究の立場から見て、濱先生が丹精込めて収集した資料の中には、中国近現代の重要な作品と貴重な版本が多く含まれている。例えば、光緒5年同文館集珍版の黄遵憲『日本雜事詩』、および日本の明治13年東京刊本、光緒22年福州美華書局版の清・李春生撰『東遊六十四日隨筆』などである。1930年代後期に巴金が編纂した「文学叢刊」のシリーズは、巴金、曹禺、李健吾などの名著を含んでいる。また魯迅、周作人、田漢らの重要な作品と版本がそろっている。1930年代に出版された様々な旅行ガイドブック、図説、地図類、例えば『虎丘山小志』（1934）、『靈岩山志』（1935）、『中華最新形勢図』（1934）、『北平旅行指南』（1935）、『北平市指南』（1936）、『北

平旅遊便覧』(1934)、『西北導遊』(1935)、『上海(遊覧)顧問』(1934)、『杭州西湖遊覧指南』(1929)、『南京遊覧指南』(1929)、『蘇州指南』(1935)などである。この類の本はほとんどが1930年代中期に出版されたもので、相互に参照して、各都市の基本的な状況を理解するのに有益である。ほかにも『商人宝鑑』(1936)、『国民政府現行公文程式詳解』(1933)、『風俗志』(中華全国, 1936)、『酬世大全集』(1932)などの書籍は、学術的な書籍ではないが、かえって当時の社会生活を広く理解するのに非凡な価値を有している。また図書館や個人が往々にしてこの類の書籍の所蔵・保存をおろそかにするために、いっそう注目すべき価値を有するのである。さらに、濱先生は撮影を好まれたため、多くの写真資料が残されており、これもまた他の類似の文庫に見られない特色となっている。

濱文庫には『春水』手稿以外に、冰心の『寄小讀者』(署名“冰心女士著”。北新書局, 1941年6月, 第26版)が所蔵されている。この本には鉛筆で注音字母が至る所に記されている。濱先生が一字一句、真剣にこの本を読んだこと、中国語の教材として学生とともに学習したことがわかる。

3

九州大学附属図書館所蔵の『春水』手稿が、冰心の最も早い時期の、最もまとまった完全原稿であるという結論は、九州大学附属図書館および九州大学関係者の大きな注目を集めた。中里見教授の論文が『中国現代文学研究叢刊』に発表されるのに合わせて、2017年6月16日午後、九州大学広報部と附属図書館は『春水』手稿に関する記者発表会を開催した。主催者側の出席者は、広報部の職員、宮本一夫館長をはじめとする附属図書館の職員、そして今回の手稿発見の経緯を説明した中里見教授であった。一方、取材したメディアは、三大新聞社(読売、朝日、毎日)、西日本新聞、日中友好新聞、二大通信社(共同、時事)、NHK テレビ、RKB 毎日放送などで、主要メディアのほとんどが出席した。日本のメディアが『春水』手稿発見を重視したことがわかる。プレスリリースが直前だったために、中国のメディアが記者発表会に参加していなかったことは残念であった。九州大学は日本時間の6月20日午前1時(中国時間の同日午前0時)に報道解禁の時間を設定した。幸いなことに、各方面の努力により、中国の『人民日報』(インターネット版)が報道解禁の直後、北京時間の6月20日午前0時1分に劉軍国記者の「时隔95年, 冰心《春水》手稿在日本九州大学被发现」という記事を掲載し、大きな反響を呼んだ。日本の各メディアでも続々と報道がなされ、同様に関心を呼んだ。

福建省の冰心文学館の協力により、筆者は6月中旬、冰心女士の娘・呉青教授に電話で手稿発見の報告をし、関連する問題についてご教示を乞うた。『人民日報』の報道が行われた6月20日の夕方、筆者は改めて呉青、陳恕両教授より電話をいただいた。呉教授は手稿発見について興味津々の様子であられ、幼少期に両親とともに日本に5年間滞在したときのことを回想して、流暢な日本語を口にされた。子供時代の記憶の神秘さに筆者は驚嘆させられた。呉教授は『春水』手稿にまつわる人々の人生の歳月と青春の友誼が、歴史のトンネルを通り抜けて、宿命であったかのように21世紀の今日再び出現したことに対して感嘆してやまなかった。

冰心文学の愛好者として、中国と日本の近現代文学研究者として、筆者は『春水』手稿の発見を心から喜ぶものである。人々はあの典雅で清新さにあふれた『春水』手稿に直面したとき、いったいどのような感慨を抱くだろうか。手稿を見たあと、私はたえずそのような想像をふくらませている。

2017年7月11日 日本福岡にて